

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター
NCGM通信

2021.12.10

Vol.1 創刊号

9月～11月（季刊）



（左から）大曲国際感染症センター長、国土理事長、松永臨床疫学室長、山田国際感染症センターフェロー、杉浦臨床研究センター長

12月10日、「Feel the NCGM Plus」創刊号を公開しました

このたび、国立国際医療研究センター（NCGM）におけるさまざまな活動を、広く一般の皆様方に紹介する情報誌として「Feel the NCGM Plus」を公開する運びとなりました。

表紙の写真は、9月29日にNCGMが「COVID-19メディア勉強会」を開催した様子です。

当日は、50余名のメディアから参加があり、活発な質疑応答が行われました。この勉強会で提供した情報は、TV・新聞などで報道されました。

NCGMは今後もこうした情報発信を続けていきます。

9月29日、COVIREGI-JPを用いた研究について、「第9回COVID-19メディア勉強会」を開催しました

冒頭、国土典宏理事長は、9月16日までのセンター病院COVID-19入院患者数が1208人であること、COVID-19に関するレジストリ研究の概要を説明しました。

続いて国際感染症センター・山田玄フェローが「重症化を予測するリスクスコアについて」、AMR臨床リファレンスセンター・松永展明室長が「ワクチン接種後のブレイクスルー感染症例について」プレゼンが行われました。



国土理事長による開会挨拶
(後方に大曲国際感染症センター長)



松永展明臨床疫学室長

リスクスコアは、糖尿病にかかっている、息切れがするなど、新型コロナウイルスに感染したときに重症化につながるリスクを点数で示した新たな指標です。点数が高いほど重症化しやすく、優先的に入院する患者を決める際などに活用できるものと期待しています。また、ブレイクスルー感染については、新型コロナウイルスに感染して、今年7月から9月22日まで



国際感染症センター 山田玄フェロー

に全国各地の600を超える医療機関に入院した3400人余りの患者のデータをもとに、ワクチン接種と症状の関連を分析しました。ブレイクスルー感染の場合、高齢者でも集中治療室で治療を受けた割合が未接種の人の8分の1、死亡した割合が3分の1と、重症化リスクは低い傾向があったことが分かりました。

11月16日、日本パスツール財団と共催で、「女性研究者の視点による感染予防への取組」セミナーが開催されました

国土典宏理事長は、開会挨拶の中で「NCGMとパスツール研究所との因縁は深く、今はNCGMの特別名誉総長である森鷗外先生が、ドイツ留学中にパリのパスツール研究所を訪問したという記録が残っています」と紹介しました。

また、「新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックの中において、男女の個人としての尊厳を重んじる姿勢や差別の撤廃、それぞれの能力が発揮できる社会体制が、COVID-19流行対策のための必須事項であり、男女共同参画

づくりのために国際社会と共に歩み、国際機関と相互に協力して取り組む必要があることを強く感じています」と述べました。



NCGMは熱帯感染症を代表とする世界の感染症対策のために、ラオスやセネガルのパスツール研究所と連携して研究を行ってきた実績がある

本セミナーでは、林 由起子博士（東京医科大学 学長）石野智子博士（東京医科歯科大学教授）ジャンヌ・P・ヴァンサン博士（仏パスツール研究所）から3演題の講演が行われました。その後、狩野部長をモデレーターに、石野智子博士、J.P.ヴァンサン博士、佐藤尚子博士（理研）、林原絵美子博士（感染研）によるパネルディスカッションを行いました。本セミナーには97名が参加しました。



モデレーターを務めた狩野繁之部長



パネルディスカッションの様子

11月26日、書籍「それでも闘いは続く -コロナ医療最前線の700日-」の発売

NCGMは、新型コロナウイルス感染症に対して、2020年1月の武漢帰国者対応やダイヤモンド・プリンセス号対応など、流行初期から職員一丸となって、治療・研究・対策に取り組んできました。「未知のウイルス」を最前線で迎え撃ったNCGMの医師・研究者が日々何を思い、どのように立ち向かい続けたか、コロナ禍の実像、医療現場の舞台裏を如実に描いた一冊が発売されました。

定価：1980円（税込）



第118回日本消化器病学会関東支部市民公開講座(センター病院共催)が開催され、オンデマンド配信されました

消化器内科診療科長（肝臓担当） 柳瀬 幹雄

本セミナーは、11月14日から21日の間、ウェブ配信されました。「新しい日常における消化器病診療」をテーマに挙げ、センター病院消化器内科の第一線で活躍している先生方に現場を踏まえた講演を行っていただきました。開催にあたり学会関係の先生方のご協力をいただきました。また、近隣の若松・戸山地区の町会長の皆様に開催案内の掲示を依頼したところ、「NCGM看護師に

よる出張介護講習の催しを通じ世話になっており、喜んで引き受けますよ」とご快諾いただいた町会長様もおられ、日頃の当院とのつながりをありがたく思いました。今回の発表を機に知識や経験を整理し、診療に向かう心構えを新たにすることができたと感じています。視聴者の皆様、運営にあたりお世話になりました皆様、ありがとうございました。



「胃炎と胃癌」
消化器内科医長
赤澤 直樹 医師



「脾臓の病気の診断と治療」
消化器内科医長
山本 夏代 医師



「消化器がんの化学療法」
がん総合診療センター
がん薬物療法科科長
小島 康志 医師

10月18日、正林督章氏(元厚生労働省健康局長)をお招きし、国際医療協力局セミナーを開催しました

NCGM国際医療協力局では、今年9月まで厚生労働省健康局長として第一線で活躍された正林督章氏に「過去の健康危機管理事案からの教訓ー地震、新型インフルエンザ、新型コロナを経験してー」と題し、ご講演いただきました。当日は、国土典宏理事長の開会挨拶、池田千絵子国際医療協力局長による略歴紹介に続き、正林氏に

災害や感染症の現場での豊富な経験とそこから得た教訓や提言についてお話いただきました。今後も国際医療協力局では、本邦および諸外国における様々な保健医療課題とその対応について、講師の知見と経験等を学び、国際医療協力事業への応用を図ることを目的としたセミナーを定期的で開催してまいります。



講師：正林督章
(しょうばやし とくあき) 氏



国土典宏理事長



池田千絵子国際医療協力局長

11月4-5日、COVID-19に関するオンライン国際会合に溝上ゲノム医科学プロジェクト長(国府台)が参加しました

バチカン市国にあるローマ教皇庁科学アカデミー（PAS: Pontifical Academy of Sciences）が主催した同会合は「パンデミックの原因、行動、結果、および科学と保健政策への影響に関する新しい洞察（仮訳）」をテーマに開催されました。ワークショップにはバチカン市国のPaul R. Gallagher国務長官や米NIHのFrancis S. Collins博士、豪州のマルコム・ターンブル前首相ら、米・英・カナダ・印・シンガポールなどから著名な科学者30

名が参加し、全世界に向けて同時配信されました。17演題の発表があり、溝上雅史プロジェクト長は「ウイルスの変異とウイルスの進化」について、講演しました。



ベネチアの風景
とイコン（聖像）

11月、NCGM肝炎・免疫センターの由雄祥代室長が「日本消化器病学会女性研究者賞」を受賞しました

女性研究者の功績を顕彰するとともに消化器病研究における女性の地位向上を目的とし創設された2021年度同賞を由雄祥代（よしおさちよ）室長が受賞しました。由雄室長は、肝炎・免疫センター、肝疾患研究部（考藤達哉部長）の所属です。今回の受賞では、由雄室長の研究「ヒト免疫学に基づいた肝疾患病態の解明と新規診断・治療法の開発への応用」が評価されました。由雄室長は、「このような身に余る賞をいただいたのは、これまで私と一緒に働いてくださった先生・研究員・技術補助員・事

務の方々、そして家族のおかげです。少しでも臨床に貢献できる成果が出せるようにこれからも仲間たちと一緒に頑張りたいです」と述べました。



由雄室長と考藤部長

10月19日、篠崎えりか看護師に東京消防庁から感謝状が授与されました

センター病院 7階東病棟の篠崎えりか看護師が、東京消防庁牛込消防署宇田川崇署長から感謝状を授与されました。これは、去る9月24日新宿区馬場下町の路上において心肺停止に陥り生命の危機に瀕

していた方に対し、迅速かつ的確な救急処置を行ったことに対してのものです。篠崎看護師は、当時駅員の方とともに、胸骨圧迫を行い、AEDを使用して救命処置を行いました。



（左から）佐藤看護部長、篠崎看護師、
国土理事長



（左から）佐藤看護部長、杉山院長、
篠崎看護師、宇田川・牛込消防署長

10月7日、「第2回レジストリフォーラム」がオンラインで開催されました（6NC連携によるレジストリデータの活用基盤の構築事業）

冒頭、国土典宏理事長は次のように挨拶しました。

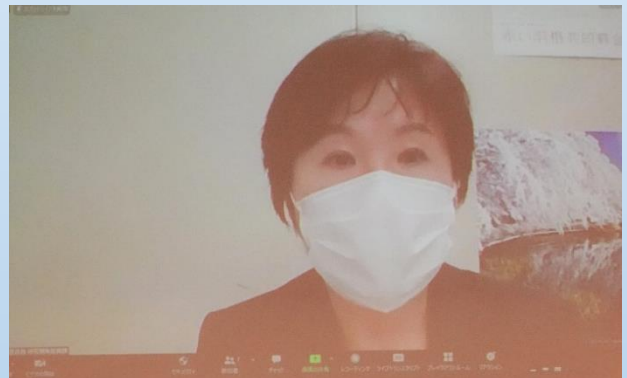
「レジストリフォーラムの第1回は3月に開催され、258名にご視聴いただきました。今回は、379名の方から登録いただき、その85%が企業関係と、企業の皆さんの関心が高いことを改めて感じ、うれしく思います。私どもは、国内でレジストリがどれくらいあるか、どういう疾患にどのくらいの数の患者さんが登録されているかを、全体像をつかむというところから始めましたが、現時点で700を超えるレジストリが登録されて、

検索するサービスを既に開始しております。当初から、企業で創薬に活用していただくため、マッチングを進めることが求められていました。既存のレジストリを創薬に使っていただくには、いろんなハードルがあります。そのハードルを乗り越え、支援するための仕組みをつくりまします。今日の6NC（ナショナルセンター）連携の事業は、昨年度発足したJHの事業として、その中心となるべき事業と期待しています。」

（JH：国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部）



開会挨拶を述べる国土典宏理事長



野村由美子・治験推進室長（厚労省医政局研究開発振興課）による来賓挨拶



泉和生・研究資源部長（中央）と中村治雅・NCNP臨床研究支援部長（左）



セッション1の座長を務める杉浦互NCGM臨床研究センター長

10月7日、腫瘍内科の高橋信行フェローによる「米国留学帰国報告会」がオンラインで開催されました

冒頭、満屋研究所長は「若い多くの先生方に、これからの臨床研究をどのようにしていくかについて、お考えいただきたいと思っています。高橋フェローが3年半にわたり米国NIH（国立衛生研究所）のNCI（国立がん研究所）で研鑽を積み、極めて優秀な成績をあげました。今日は高橋先生のお話を聞いていただいて『よし、私もそれに続く！』と思っていたら、この上ない喜びです」と話しました。高橋フェローは、2018年2月

から2021年7月までNCI Medical Oncology fellowshipに参加しました。最初の1年はクリニカルローテーション、2年目はリサーチ期間に入り、その後1年半アドバンストフェローシップを過ごしました。

そして、高橋フェローは、アメリカ臨床腫瘍学会から、2021年のYoung Investigator AwardをNIHではただ1人受賞するという目覚ましい成長ぶりを発揮しました。



満屋裕明研究所長は、世界最大のメディカルセンターといえるNIH（ワシントンD.C.に所在）についても紹介しました



梶尾裕副院長は「NCGMには、高い志を抱いている人が多いので、ぜひ参考にさせていただきたい」と述べました



高橋フェローを腫瘍内科に迎えた期待を語る、山田康秀がん総合診療センター長



高橋信行フェローは、研究課題である小細胞肺癌についても発表しました

11月5日、ボイラー安全祈願祭(ふいご祭り)を行いました

ふいご祭りとは、火や金属などを扱う事業者の安全祈願の行事です。NCGM戸山地区のボイラー室では、「ふいご祭り」に由来する「ボイラー安全祈願祭」を毎年恒例の行事として行っています。国土理事長・杉山センター病院長をはじめ、各職場から代表者が参

加し、穴八幡宮の神主をお呼びして玉串拝礼などを行いました。厳かな雰囲気の中、一年間の安全操業に感謝するとともに、火を扱う業務などに従事する職員並びに施設の安全を祈念し、次の一年も無事故で操業ができるよう願いました。



ボイラー室の神棚に向かう国土理事長



榊を捧げる藤原ボイラー技士長

10月29日、センター病院で、救急隊向けのオンラインセミナーを開催しました

直接会場で顔を合わせた講演ができないため、初めての試みとして救急隊に向けたオンラインセミナーを開催しました。救命救急センターの福島憲治医長の進行のもと、「切断指の初期対応と適応」について形成外科の景山貴史レジデントが発表しました。新宿区、杉並区、中野区の隊員に向け、事前に聞きたい内容をアンケート形式で集計し、その内容も含めたスライドを作成しました。約1時間の講演に、救急隊の方々からも積極的に質問が寄せられ、切断指の取り扱い方法や搬送後の治療など関心の高さがうかがえました。救

急隊からは「切断指の搬送についてはいつも搬送先に苦慮していて、本当に勉強になった。今回の知識を全員で共有したい」と感謝のお言葉をいただきました。



(左から) 小林憲太郎医師、福島医師、徳原真医長、景山レジデント

10月5日、「第1回 COVIREGI研究報告シンポジウム」が開催されました

日本で新型コロナウイルス感染症の入院患者の情報を収集する「COVIREGI-JP（COVID-19に関するレジストリ研究）」は、多数の医療機関の協力を得て実施してきました。最大時には900を超える医療機関が参加され、10月時点で5万例を超える症例が登録される、日本で最大級のCOVID-19入院患者のレジストリになりました。大曲貴夫国際感染症センター長から「このレジストリはデータを集めるだけではなくて、きちんと研究の形としてまとめて、世の中に還元していくことが重要です。今後も積極的にこうした機会を作っていきたい」との冒頭挨拶がありました。松永展明室長が事務局として「研究の進捗状況報告、行政機関での活用」を紹介しました。続いて、NCGMからは、次のプレゼンテーションが行われました。

浅井雄介 研究員（AMRCRC）：「日本における高齢者COVID-19入院患者の臨床疫学および重症化因子の解析」

山田玄フェロー（DCC）：「日本人のCOVID-19患者の呼吸不全を予測するシンプルな予測スコアリングの作成と性能評価」

上記を含め、6演題が発表されたこのシンポジウムは、400人を超える参加者が視聴しました。



上段：大曲センター長（左） 松永室長（右）
下段：浅井研究員（左） 山田フェロー（右）

NCGM職員の著書紹介

子どもの「やり抜く力」を育むワークブック イライザ・ネボルジーン◆著 大野裕/ 宇佐美政英（国府台病院）◆監訳

すぐに挫折してしまう、挫折から立ち直るのが苦手、困難な状況になるとすぐにあきらめてしまう、そんなお子さんに身につけさせたい、「Grit=やり抜く力」。「やり抜く力」は粘り強さと自制心を特徴とする特性で、成功者に多くみられる能力として近年注目されています。本書は認知療法という

心理療法の理論に基づき、やり抜く力を授けるワークブックです。

訳者として国府台病院心理指導室より6名の公認心理師が参加しました。

岩崎学術出版社
2021年9月



10月1日、メディアセミナー「薬剤耐性(AMR)対策 最新動向 2021」がオンラインで開催されました

AMR臨床リファレンスセンター (AMRCRC)は、厚生労働省委託事業として2017年に設立しました。本セミナーでは、5年目を経過した「AMR対策アクションプラン」の

次への課題、日本における抗菌薬の使用状況、市民意識調査の結果など、これまでの活動と今後の展望を発表し、医療系メディアを中心に27名が参加されました。

「薬剤耐性(AMR)対策の最近の話題」



AMRCRC
センター長
大曲 貴夫

「抗菌薬使用状況をより広く効率的に共有する方策」



薬剤疫学室
大野 茜子

「SDGsとAMR」



臨床疫学室 室長
松永 展明

「市民の意識調査からみえること」



情報・教育支援室長
藤友 結実子

NCGM職員の著書紹介

当直ハンドブック

井上信明 (国際医療協力局人材開発部) ほか ◆編集

当直や救急外来で患者を診る機会のある研修医や若手医師が遭遇するイベントや臨床疑問を2分で解決し対処できることを目標にプランニング、構成されたコンパクトかつ実践的なハンドブックです。各領域救急医療の第一線で活躍している医師たちが総力を挙げて執筆しました。当直や救急での新しいスタンダードとなる「現場で使

える必携ハンドブック」。
総編集・
志賀 隆
国際医療福祉大学
救急医学教授

中外医学社
2021年3月



9月28日、植村茂さんから絵画をご寄贈いただきました

救急科・植村樹医師の父であり、画家の植村茂さんから、センター病院に壮大な絵画の寄贈を受けました。

理事長室を訪問した茂さんは「この絵は、人生の始まりから終焉までを描いた作品です。

『病院』という、まさに人間の生と死を舞台にしている場所に展示されることを本当に感慨深く思います」と述べました。

国土理事長は「このような大作をご寄贈いただくことは大変貴重なことです。多くの方々に鑑賞していただき

い」と述べ、感謝状を贈りました。この絵は、センター病院研修センター棟1階休憩スペースへの通路に展示されていますので、ぜひご覧ください。



(左から) 木村救命救急センター長、植村医師、植村茂さん、国土理事長、針田企画戦略局長



タイトル『人の時と空』は、縦1.6メートル、横5.8メートルの超大作です

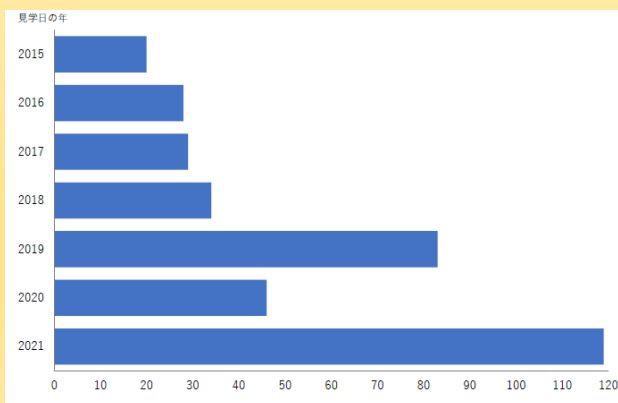
国府台病院・児童精神科ウェビナー2021を開催しています

NCGM国府台病院では、コロナ禍で病院見学が十分にできない状況を鑑みて、昨年度から医学生・研修医を対象としたオンラインによる児童精神科サマーウェビナーを開催しました。

令和3年8月26日（木）18時からMicrosoft Teamsを利用して90分間開催しました。全国から合計45名の医学生が参加し、児童精神医学総論と児童精神科医になるための制度を宇佐美政英・児童精神診療科長が説明したうえで、リアルタイムで質問を受け付けました。現役の児童精神科レジデント数名も参加し、そのキャリアパスについて話し合いました。

本年度、児童精神科では、のべ100名を超える見学の申込みを受けましたが、新型コロナウイルス感染症による見学辞退なども多く、児童精神科臨床の現場を見てもら

える機会が少なくなっていました。国府台病院では、全国的に不足している児童精神科医を志望する各地の医学生の希望に沿った見学・研修プログラムを策定しております。既に、2015年から43都道府県、75大学から、のべ359名から見学の申込みがありました。今年度は12月23日（木）にウィンターウェビナーも企画しており、さらなる情報発信に努めてまいります。



見学申込者数の推移

NCGM職員の著書紹介

どうしてしんがたコロナになるの？

松永展明（AMRCRC臨床疫学室長）監修、せべまさゆき 絵／WILLこども知育研究所 編著

とつぜん園も学校もお店もお休み。友だちにも会えず、何度も手を洗わされる。なんで?? 訳もわからず自粛生活を強いられる子どもたちがコロナを理解し、感染予防策を身につけられる、やさしい新型コロナウイルスの絵本。

この絵本は、かわいいイラストと言葉で、“新型コロナウイルス”について幼

児にも理解しやすい内容になっています。巻末には「おうちの方へ」というコラムもあります。

金の星社
2020年8月



8月、大杉満糖尿病情報センター長が、WHOの糖尿病技術諮問委員(TAG-D)に着任しました

WHOの専門家会議である、糖尿病に関する技術諮問グループ（Technical Advisory Group on Diabetes：TAG-D）の委員として、NCGMの大杉満糖尿病情報センター長が選出され、着任しました。WHOの提案は、世界規模のものになるのですが、各国の経済状況や医療供給体制により糖尿病をはじめとする非感染症疾患（NCD）の診療体制は大きく異なります。それでも、WHOが糖尿病に関し克服すべきと考えている課題は：

- 予防法の啓発や、スクリーニング検査が普及しておらず、糖尿病が未診断の者が多い。
- インスリン注射など、有効な治療が様々な理由で、十分に活用されていない。
- そのため、下肢切断や失明、末期腎不全などの重大な合併症が起こりえる。

こうした事態を防ぐために、WHOとしては各国の現状調査を元に、糖尿病の予防法や治療法を普及させ、糖尿病の発症を予防することと、発症してもどの国にいても質の保たれた治療を受けられることを目標に掲げています。

世界の医療政策を主導するポストに就いた大杉センター長は、次のように語っています。

「今回発足したTAG-Dは世界中から選出された12人の委員で構成される糖尿病に関する委員会です。

各国での調査を元に、糖尿病の予防に関する啓発や施策、糖尿病発症後にも有効な治療をどの国であっても受けられるようにする施策を

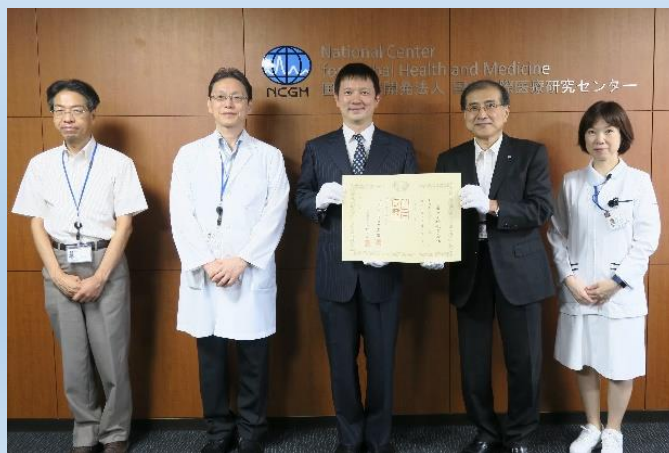


WHOに提言することが目的です。現在、初会合を控えている段階ですが、世界中から地域や専門性に富んだ委員が選出されており、私はアジア太平洋地区から選ばれた3人の委員の1人です。アジア太平洋地域は、人口の多さとともに、人口あたりの糖尿病発症率も高いと考えられており、また国の経済状況や医療供給体制が多様ですので、この委員会で共有される情報は、我が国の今後の糖尿病に対する医療政策にも役立つと考えます。また、日本は皆保険制度で医療アクセスがよく、糖尿病診療に関しても比較的安価に供給できていると考えられますが、高齢者が増加し耐糖能異常を持つものが増えていることと、中年以降の男性では肥満を背景にした代謝性疾患が増えていることや、それらに対する政府・自治体や学会等団体の取り組みをTAG-Dで共有したいと考えています。」

8月3日、第一法規株式会社に、紺綬褒状授与式を行いました

同社は、1903年創業という歴史を持つ、官公庁関連の出版物、法務、行政、福祉などの出版物などの書籍の出版社です。同社から、令和2年7月15日に寄附の申し出があり、同月17日に1,000万円を受領しました。また令和3年7月30日にも1,000万円のご寄附を頂戴しました。ご寄附の目的は新型コロナウイルス感染症対策に対する業務や研究に役立てるため、とのこと。国土理事長は「今、まさに第5波のピークが見えない段階

で、本当に“緊急事態”ですけれども、ご寄附は、患者さん・職員の安全を守るため、研究にも使わせていただいております。このようなお志をいただいて、なんとか困難を収束させたいと頑張っております」と述べました。



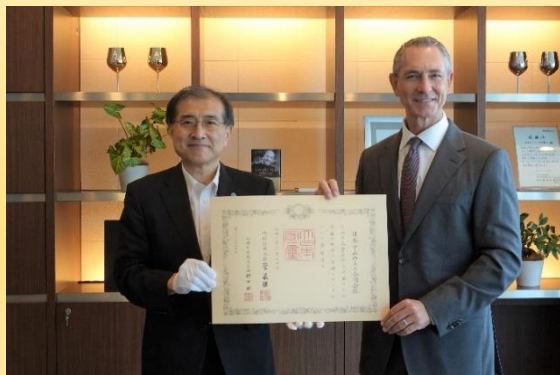
(左から) 山田統括事務部長、杉山院長、田中英弥代表取締役社長、国土理事長、佐藤看護部長

8月11日、国土理事長が日本アムウェイ合同会社を往訪し、紺綬褒状授与式を行いました

同社から、令和2年7月1日に寄附の申し出があり、同月15日に1,000万円を受領しました。ご寄附の目的は、新型コロナウイルス感染症対策特別基金として、とのこと。

同社は、米国ミシガン州グランドラピッズ東郊のエイダに本社を置く、アムウェイコーポレーションで、1959年に設立されました。日本では、1979年に日本アムウェイ株式会社として営業が開始され、2008年に組織および社名が変更されました。

国土理事長が、ご寄附に対して感謝の意を英語で述べると、ストライダム社長は、終始笑顔で対応され、「ありがとうございます」と日本語でも言ってくださり、帰りの際は、エレベーターの前まで送っていただきました。



ピーター・ストライダム社長 (右)

センター病院におけるロボット手術をご紹介します

鏡視下手術領域外科医長 野原 京子

1999年にda Vinci® Surgical System (Intuitive社)の登場を契機にロボット支援下手術 (robot-assisted surgery、以下RS) は急速に発展してきました。

本邦では、2009年に薬事承認を受け、2012年に前立腺癌に対する前立腺全摘術が、2016年に腎癌に対する腎部分切除が保険収載され、2018年には8領域 (肺、縦隔、心臓、食道、胃、直腸、子宮、膀胱) にわたる12術式が一気に保険収載されました。

RSは気腹・気胸下に施行される点では従来の鏡視下手術と同じですが、①手振れ防止機能、②高解像度三次元内



ロボット手術のイメージ図

視鏡、③7つの関節をもつ鉗子、等のロボットならではの利点によって、より精緻で再現性の高い手術が可能となっています。当院では、泌尿器科 (前立腺、腎臓)、産婦人科 (子宮)、呼吸器外科 (肺、縦隔)、大腸肛門外科 (直腸)、食道胃外科 (胃) にてRSを実施しております。開腹・開胸手術と比べても傷が小さく、術者と患者さんの両方にメリットのある手術です。



ロボット手術を行う清松知充大腸肛門外科診療科長と大谷研介医師

センター病院では、肥満外科治療を行っています

肥満治療チーム

センター病院では、肥満外科手術を行っています。対象となる患者さんはBMI 32.5-40で糖尿病を有する20歳以上60歳以下の方 (臨床研究で手術を行う場合)、BMI 35以上で糖尿病、脂質異常症、高血圧症、睡眠時無呼吸症候群のいずれかを有する方 (臨床研究以外で手術を行う場合) です。費用は術前の内科入院および外科入院を合わせて50万円程度かかります。

減量を目指しているのになかなか思うように進まない患者さん、基礎疾患の管理に難渋している肥満患者さんは糖尿病内分泌代謝科まで、ご相談ください。

(登録基準を満たしていても手術が受けられない場合もあります。術前の精査にて判断いたします。)



8月18日・19日、国府台病院児童精神科は、「こころの健康づくり対策事業 医療従事者専門研修」を開催しました

同研修は、令和3年度厚生労働省「こころの健康づくり対策事業」の一環として、オンライン形式で開催されました。

児童精神科スタッフと全国の専門家を中心とした講師陣による、児童精神医学に関する集中的な総論講義で、注意欠如・多動症や自閉スペクトラム症などの発達障害やうつ病、不安障害などの疾患論から、不登校や自殺・自傷行為など子どもを取り巻く社会的問題、薬物療法や入院治療など治療論まで幅広く網羅しました。

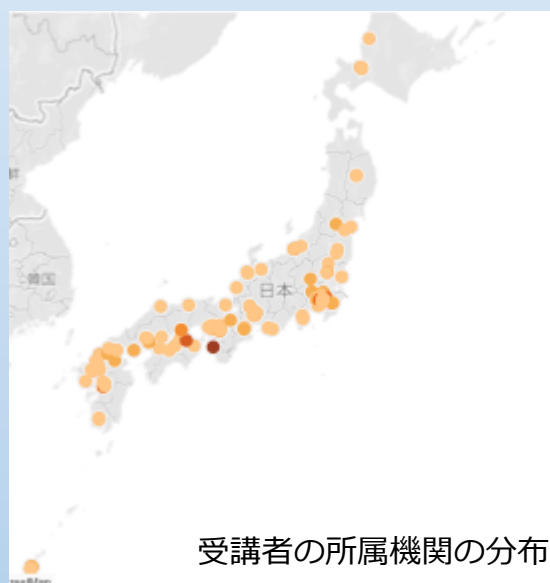
今回は、オンライン上のポータルサイトを利用することで、多くの方が受講できるように対応しました。これにより昨年度80名であった定員を150名に増やして募集でき、また、安定した接続環境を維持できました。

実際に受講生から「遠方からも負担なく参加できてありがたい」、

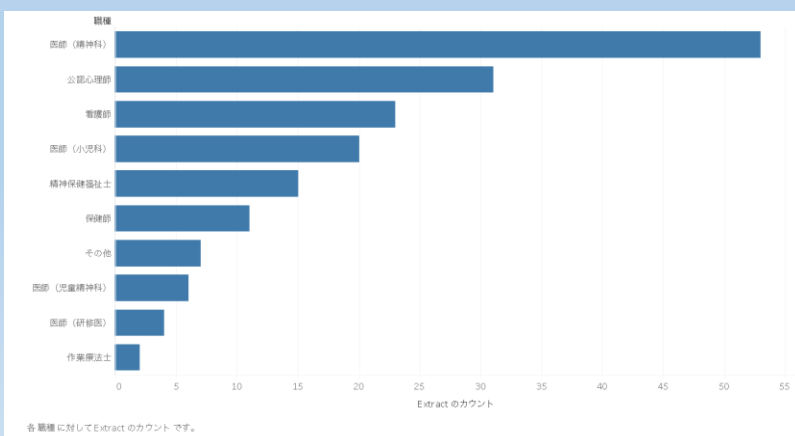
「子どもがいても自分のペースで受講できた」、「配信がうまくいかないということもなくスムーズに視聴できた」など、お褒めの言葉もいただきました。

今年度は、引き続き、医療従事者専門研修（10月）、ひきこもり対策研修（11月、1月）、医療従事者専門研修応用コース（2月）を予定しています。

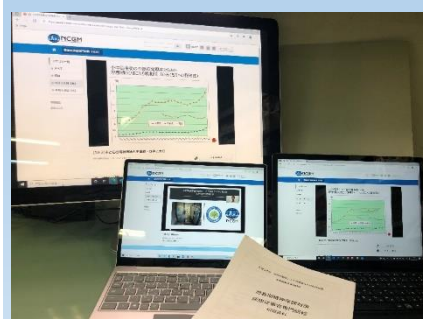
児童精神科に関する知識と情報をNCGMから全国へ発信していけるように邁進してまいります。



受講者の職種



当日のオンライン画面



国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！ セネガル共和国 Vol.1

国際協力機構（JICA）セネガル共和国母子保健サービス改善プロジェクト
長期派遣専門家 菊地紘子（保健師）

アフリカ大陸の西の果て、おもてなしの国セネガル。国際医療協力局は2009年から局員を派遣し、行政・医療機関・地域が協働して母子保健サービスの質を改善する取り組みに貢献しています。

私は2019年10月から、保健医療行政・看護助産教育の専門家として「妊産婦・新生児が尊重されたケア」に取り組んでいます。COVID-19状況下においても、母子の安全を守り、安心して妊娠出産ができるよう、州医務局の能力を強化しています。先日、母子保健局とと

もに州の母子保健関係者を招聘し、指導者研修を開催しました。彼らがそれぞれの州で医療従事者研修を実施し、臨床現場で「妊産婦・新生児が尊重されたケア」が実践できるよう、支援体制を整える活動が続いていきます。



指導者研修：州の母子保健関係者と新生児蘇生法演習の様子
（中央が菊地保健師）

在外職員奮闘記！ ラオス人民民主共和国 Vol.2

国際協力機構（JICA）ラオス持続可能な保健人材開発・質保証制度整備プロジェクト
長期派遣専門家 宮崎一起（看護師）



ラオス保健省は保健人材の質向上に取り組んでおり、私は、2020年1月より看護行政専門家として赴任し、主に看護師国家試験の創設と実施を支援しています。「国試と卒業試験の違いは？」「国試に落ちて働けるのか？」という

協議に始まり、全国での説明会、出題基準や問題作成、小規模国試の実施と結果分析等を経て、2021年1月に、ラオス初の看護師国家試験が行われました。「ラオス保健人材の質向上に貢献する大きな一歩を踏み出せた」と、保健省の方と喜びを分かち合え、とても嬉しい瞬間でした。

ラオスの保健サービスの質向上に寄与する国家試験・免許登録制度の構築に向け、引き続き尽力してまいります。

（写真：会議で発言する宮崎看護師）

在外職員奮闘記！

コンゴ民主共和国 Vol.3

国際協力機構（JICA）コンゴ民主共和国保健人材開発支援プロジェクト
チーフアドバイザー 及川みゆき（保健師）

私は、2018年10月からJICA保健人材開発支援プロジェクトにチーフアドバイザーとして従事しています。また、今年5月には同僚の皆河由衣さんも基礎教育専門家として着任しました。全国26州のうちの1州をパイロットとし、中央と州の保健省人材関連部署と活動しています。1州といっても九州より大きく、人口も400万人以上です。6月初旬にCOVID-19第三波が宣言され、集会の禁止、州外移動にはPCR検査陰性証明書の携帯が義務付けられましたが、WEB会議の活用、予防措置もしつつ7月29日にはパイロット州にて州保健セン

ター運営委員会の開催を支援し、私たちが関わった州保健人材開発計画2021-2025が承認されました。



州保健センター運営会議での及川保健師

在外職員奮闘記！

カンボジア王国 Vol.4

国際協力機構（JICA）カンボジア王国 UHC達成に向けた保健政策アドバイザー
兼分娩時及び新生児期を中心とした母子継続ケア改善プロジェクトチーフアドバイザー
野崎成功真（医師）

新型コロナウイルス流行の最中、昨年10月に、保健省への保健政策アドバイザー兼新生児ケアの改善に取り組むプロジェクトのチーフアドバイザーとしてカンボジアに赴任しました。カンボジアも国際医療協力局が継続的に支援を行ってきた国ですが、2015年までに妊産婦の死亡を1/4に、乳幼児の死亡を1/3に削減するというミレニアム開発目標を達成し、残された課題として新生児死亡の削減が喫緊の課題となっています。また、政府はユニバーサル・ヘル

ス・カバレッジの達成に向けた努力を行っていて、このための技術支援が不可欠です。こうした政府の努力に少しでも貢献できるよう、微力ながら尽力していく所存です。



保健省主催母子保健デーのイベントで、プロジェクト活動について発表

8月2日、山本尚子WHO事務局長補をお招きし、iGHPセミナー(オンライン)を開催しました

NCGMのグローバルヘルス政策研究センター(iGHP)では、グローバルヘルスの第一線でご活躍の山本尚子WHO事務局長補(ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ/健康づくり担当)をお招きし、「SDGs時代のグローバル・ヘルス」と題し、iGHPセミナーでご講演いただきました。

当日は、国土典宏理事長の開会挨拶に続き、磯博康iGHPセンター長の司会のもと、山本先生にコロナ禍が世界に与えた影響やWHOとしての対応、ポストコロナにおけるより健康な世界の構築に向けた提言や日本に期待されることをお話いただきました。最後に、「世界とともにあるべき社会を創造し、世界へ貢献していきましょう」と力強いメッセージがありました。

講演後の交流会ではキャリアの積み方からWHOや社会の在り方まで、参

加者から多岐にわたる質問が寄せられ、山本先生はその一つひとつに丁寧にお答えくださいました。後日、山本先生のtwitterで同セミナーについての発信がありました。今後もiGHPではグローバルヘルスリーダー・国際的政策研究人材の育成を目的としたセミナーを定期的に開催してまいります。

山本尚子WHO事務局長補(左上)、
国土典宏理事長(右上)
磯博康iGHPセンター長(左下)



プレスリリース情報 (9月)

9.15	AMR臨床リファレンスセンター	メディアセミナー取材のお願い 薬剤耐性 (AMR) 対策 最新動向2021
9.15	国立成育医療研究センター・NCGM	国内最大の新型コロナウイルス感染症レジストリを使って“小児コロナ入院患者”の実態を解明～多くは無症状・軽症。無症状であっても入院は比較的長期間に及んでいた～
9.21	NCGM・(株)レイ	COVID-19患者のECMOでのウイルス漏出に対する安全性の向上 ～ECMO人工肺カバーの開発～
9.22	NCGM	第9回COVID-19 メディア勉強会ウェブセミナーご案内 COVID-19に関するレジストリ研究『COVIREGI-JP』
9.29	NCGM	「第1回 COVIREGI研究報告シンポジウム」開催

研修医の窓

TOKYO2020の大会ボランティアを務めました！

研修医2年目・藤本 華奈

オリンピックパラリンピックを医師人生のスタート地点にしたいー中高大と陸上競技に注力するとともに、しんどさを知るからこそと高校時代から大阪マラソンなどのボランティアに携わってきました。「世界中の視線と人が集まる大イベント」で、日本は世界にどんなサポートを見せていくのだろう。いつからかその舞台上で求められているものが、目指す医師像に近づくヒントになるような気がして、参加できる道を探しました。しかし研修医で医療者として携わるのは厳しく、それならばと5年生の秋に一般募集の大会ボランティアに申し込み、願書には「開催当日には、東京で研修医として働いているはずです」と書き加えました。そして約3年後。勤務には完全に支障をきたさないという約束で先生方の許可をいただき、夏が始まりました。救急科業務の夜勤明けなどを駆使して合計15日間、国立競技場にいました。意識したのは、“ボランティアとして自分がいる”意味。担当

の仕事の他にも、字や絵を描くのが好きな私は、無観客・無声援開催で殺風景な会場に彩りを加えようと、レース後の選手へ「Great race!」のメッセージボードを掲げたりしていました。自主的にエレベーターのボタンを消毒していると、海外メディアの方にとっても感謝されたのを覚えています。炎天下での体力消費、言語の壁・・・全部引っくるめてオリパラを作り上げる一員なのだという使命感を持って働くことができました。十人十色なボランティアの仲間とオリパラの裏側に関われたのは今後一生の財産になると確信していますし、必ず生かしていきたいです。厳しい状況下で貴重な経験ができたのは当院スタッフの皆様が、温かく応援してくださったおかげです。この場を借りて御礼申し上げます。



プレスリリース情報 (10月)

10.4	AMR臨床リファレンスセンター	抗菌薬意識調査レポート 2021 発表
10.4	国際医療協力局	2021年度 国際保健基礎講座-オンラインコース-第6回 女性とこどもの健康改善
10.8	NCGM	新型コロナウイルス感染症後遺症の記述疫学とその出現・遷延リスク因子に関する報告
10.15	AMR臨床リファレンスセンター	11月は「薬剤耐性 (AMR) 対策推進月間」
10.19	NCGM、国立がん研究センター、東大、AMED	大腸がんが免疫の攻撃から逃れる機序を解明 がん細胞の認識に関わる分子の異常による免疫回避を明らかに
10.21	NCGM	尿路感染症による入院治療の日本での実態 - 2010年から2015年のDPCデータベースを用いた後ろ向き研究の報告 -

研修医の窓

■「日本内科学会 ことはじめ 2021東京」優秀演題賞を受賞して 研修医2年目・佐々木 健

今年4月、多くの膠原病科の先生方、また研修医の先輩方のお力添えを頂きまして、医学生・研修医の「日本内科学会 ことはじめ 2021東京」にて優秀演題賞を受賞することができました。

演題名は「ステロイド誘発性精神障害の併存もみとめた神経精神ループスの1例」であり、非常に珍しい症例を発表させて頂きました。このような過大な賞を頂き、大変身が引き締まる思いであると同時に、これを機に一層日々の研修や勉学に精進しようと思う次第であります。また私にとっては初

めての学会発表であり分らないことが多かったですが、終始丁寧に御指導下さった膠原病科の先生方に今一度厚く御礼申し上げます。



佐々木研修医（左）と優秀指導者賞を受賞された金子礼志膠原病科長（右）

■ 研修医1年目の学年スクラブを作りました！ 研修医1年目・波多野 裕斗



今年4月から33名の1年目研修医が働き始めています。まだ分からないことも多くご迷惑おかけしていますが、一日でも早く一人前の医師になれるよう日々奮闘しております。さて今回は、そんな1年目研修医

の学年スクラブをご紹介したいと思います！

左肩のロゴは、私たちが入职した頃の戸山の桜をモチーフにしています。コロナ禍で不安の多い中でも私たちを迎えるように咲いていた桜が印象的であり、また働き始めた頃の初心をいつまでも忘れずに働き続けられるようにという願いをこめたデザインです。

このスクラブを着ている職員を見たら1年目なんだなと優しくしていただけますと幸いです！今後とも温かいご指導をよろしく願いいたします。

研修医の窓

JRCガイドライン勉強会に参加させていただきました

研修医1年目・窪田成悟

10月30日（土）、救急科主催のJRC蘇生ガイドライン改訂に伴う国府台病院との合同勉強会に参加させていただきました。COVID-19の影響で、これまでオンライン勉強会が主体であった自分にとって、このような対面での大規模な勉強会は初めての経験でした。

実は、休日お昼まで寝ているくらいなら…という程度の軽い気持ちで参加を決めたのですが、いざ勉強会が始まると先生方の要点を押さえた解説も相まって興味深い内容で溢れており、非常に充実した時間を過ごすことができました。

心停止していない患者に心臓マッサージを行っても大きな有害事象はない（ので、疑った場合はためらわない）ことや、妊産婦蘇生では仰臥位で用手的子宮左方移動が推奨される（＝大動脈の圧迫を解除する）ことなど、実践的で印象に残っています。ふと気になって院内メ

ールを振り返ってみると、研修医でも参加できる勉強会やレクチャーの案内をたくさん発掘できました。

ささやかな動機をきっかけ

に色々な企画に参加してみることで思わぬ収穫を得ることができる、という気付きを今後の研修にも活かしたいと思います。

貴重な機会をご提供くださいました救急科の先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。



研修センター棟5階大会議室

プレスリリース情報 (11月)

11.1	国際医療協力局	2021年度 国際保健基礎講座-オンラインコース-第7回疾病対策概論
11.29	国際医療協力局	2021年度 国際保健基礎講座-オンラインコース第8回 もう迷わない！情報検索 虎の巻

7月14日、国府台医療連携フォーラム2021を開催しました！

NCGM国府台病院では「COVID-19」をテーマとした医療連携フォーラムを開催しました。このフォーラムは、千葉県東葛地域の当院連携医を主な対象に、今年オンライン参加と会場参加の「ハイブリッド開催」とした初の試みでした。

当日は、当院の狩野俊和医療安全・感染対策部門長から「東葛地域と国府台病院のコロナ診療」、大曲貴夫NCGM国際感染症センター長から「新型コロナウイルス感染症」のタイトルで地域のCOVID-19の状況や最新の知見等について講演しました。時宜を得た話題だったこともあり、活発な

質疑応答が行われ、参加者からも「とても分かりやすく次回もぜひ参加したい」などのコメントが寄せられました。



(左上から時計回りに) 狩野医療安全・感染対策部門長(演者)、吉野先生(連携医)、考藤達哉肝炎・免疫研究センター長(座長)、大曲国際感染症センター長(演者)

センター病院正面玄関前、国際庭園は、ボランティアの皆さんによって、四季折々の花を咲かせます

来院・入院される患者さんの憩いの場ともなっている「国際庭園」は、長年ボランティアの皆さんによって、植え替え、草むしり、花の手入れが行われています。ボランティアの方は、近所にお住まいのセンター病院の患者さんであったり、園芸会社の方であったり、しますが、「患者さんに『ありがとう』と言われるのが何よりうれしい」とおっしゃっています。皆さんも、ぜひ国際庭園にお越しください。多くの人に親しみをもってもらえるよう「国際庭園」

の看板(右)は、小学5年生のベトナム人の女の子により作成されました。

夏にはひまわりの花が咲きました

